

heisei16

六花

Rikukwa haikukai

5

晦日そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho
凧 ohdako no orikite kusa no iro to naru
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryoyaku ni

designed by Asuka

訪 戴



山田六甲

辻亨子最期の句会写真出てきて

色褪せることなどはなし緑の日
花を観に女房質に入れてでも
桜咲く咲くと分かつてゐたけれど
花冷や身辺の書を片づけて
汐干潟ミソヒトモジの玉津島
戌しおまねきの日の札受けてゐる卯波風
望潮一匹が出てワーツと出る
岩を抱く松の根つ子に春惜しむ
下座せよと権現様の春の鳶

落椿手鞠唄もて慰めな
指先に砂濡れて付く桜貝
木の國に東照宮とや松の芯
緋牡丹や雄のひよこを買はされて
葉桜や頭抱へて猫眠る
春の蚊の死にに生まれて来りけり
踏みさうなところに咲ける董草
玄室へ誘ひて消えし揚羽蝶
日本の血をひく雲雀啼き揚る
卯波立つまでは育たず和歌浦
春過ぎて東の方に紀三井寺
春すでに通り過ぎぬし和歌浦
紀伊国にぶらりと来れば花蜜柑

春めく光

二 瓶 洋 子

門に來しわが待ち人よ冬菜売り
冬菊や妻を称へてやまぬ喪主
蕪の葉覗きてゐたる雪間かな
藪巻の中に椿の一花かな
病む人に春めく光届きある

嘘

鳴 海 清 美

吉凶の糾ひゐたり 猓枕
湯けむりと雲のあはひを女正月
ポケットに一枚のメモ風疼く
嘘ひとつ喉元にあり寒の水
美しき嘘狐火の走りたる

葵 祭

中 村 房 江

つくづくくと牛見る葵祭かな
米櫃に米足し入れて陰祭
一步よりはや筍を探るさま
学ぶ灯の色あたたかし釈尊忌
天牛や日銭勤めの日曜日

木の国に

松 山 律 子

全国の蜂が集まる木の国に
秒針は微速前進五月来る
まぜの町介護ロボット貸し出し中
そのうちに死んでやるわい春夕焼け
もう少しこの世もいいか別れ霜

春なかば役目終りし弁当箱

林 裕美子

美しき星からの文小雪舞ふ

肩寄せて冬の星座を探す子ら

誰にでも挨拶する子日脚伸ぶ

春惜しむ包丁研ぎの伝授かな

弁当箱の役目が終わった。つまり子どもが卒業して、お弁当を持つていく必要がなくなった。今まで母親は体調のすぐれぬ時もあったのだから子どものために弁当を作って持たせた。とにかく今は解放されて、大きな安堵と、心の片隅には少し拍子抜けしたことが、細かい交ぜになつて複雑な春の半ばを過ごしているのである。女性にはよく理解できる句ではなからうか。林さんは子ども俳句に格別の才能を発揮する人。

橙木集

白鳥

貝森 光大

白鳥の羽の軋みが降ってくる
北国に来てまで河豚の膨らめり
口あけし鮫鰯ピカソ遠叫びおり
大時化の船に鱈のジャッパ汁
一身を黙に沈めて寒の鯉

デパート

小田

元

LOVE

角田 信子

春と冬引つ張りあひしエレベーター
観覧車戦遠くに寒のあけ
立春の水音真白な立看板
春一番はづれ馬券を拾ひけり
亀鳴くやデパート屋上亀売場

定食にキャビアを添えてバレンタインデイ
愛の日やにんにくまみれのエスカルゴ
デイオールの白いリボンやバレンタインデイ
二ん月の指先だけのラヴゲーム
左腕に抱かれる猫や春の雪

なまこ壁

梶浦玲良子 鳥帰る

志方 章子

胸に穴つづく幾日もがり笛
きさらぎが追つかけてくる海鼠壁
獵犬を背負つて降りる夜の雨
寒芹を摘みつつイヴににじり寄る
新らしき墓碑寒雁の離れゆく

あらをかし百面相の壬生の面
坪庭の四角き空を鳥帰る
春昼や欠伸をすれば涎落つ
白梅のほころびはじめ他所の庭
万歩計九千五百歩草青む

余熱

笹村 政子 春潮

信崎 和葉

アイロンの余熱もて足る春の服
こぼれたる針に日の差す針供養
恋猫の鳴き声を追ふ終ひ風呂
鳩の尾羽引き摺り歩く春の昼
鴉の巢増ゆるにまかせ母病めり

春潮の光がとどく遊女塚
落椿爪先立ちに坂下る
東風ぬけるくぐり戸に猫寝そべつて
さへづりや巨石二つのくさび跡
恋の猫漁港の路地や影の濃し

六花集

会員自選

平居 濤子

豆撒きの豆もて余す夫婦かな

あとがきで知る父の愛春立つ日

下萌や海の空港一機たつ

バレンタイン策なき愛のチョコレート

如月のとろりと甘き麻酔薬

林 裕美子

横山 迪子

美しき星からの文小雪舞ふ

肩寄せて冬の星座を探す子ら

誰にでも挨拶する子日脚伸ぶ

春惜しむ包丁研ぎの伝授かな

春なかば役目終りし弁当箱

春よ来い一歩ぢやなくて駆けて来い

待ち合はせ行き違ひなる寒さかな

待ちぼうけ芯まで冷えて帰りけり

節分の鬼よ喋りに来ていいよ

海よりも山よりも炬燵読書良し

菜根譚



六甲

如月のとろりと甘き麻酔薬

平居滯子

甘いという言葉には、「甘い罿」「甘いしつけ」「見通しの甘さ」「甘い言葉」「甘ちゃん」などと、およそ善良な言葉ではない場合が多い。善良な言葉とすれば私の作品評が「甘い」というくらいのことである。もう一つあった。弟子を「甘やかす」ので有名な六甲である。間違いない。麻酔薬が甘いといえは思い出すのが、胃力メラを呑むときのあの麻酔薬にちがいない。甘いものには気をつけよう。冴え返る日がまだまだある「如月」(きさらぎ)は陰暦二月の異称。甘い恐怖を巧く詠んだ。

春よ来い一歩ぢやなくて駆けて来い 横山迪子

作者は大病した。寒さが堪えるのは、老いのせいではなく、予後のせいなのである。だから、春がそこまですて来ていなながら、一進一退を繰り返す。一歩一歩着実に春が来る」という慣用をふまえて、一歩ずつではなく一気に暖かい春が来て欲しい、と叫んでいるのである。そのことを「駆けて来い」という言葉を遣ったのである。

兵馬備春一番に起立せり

延川五十昭

作者はよく、中国文化を愛する。つつじヶ丘の豪邸には唐三彩や中国家具・中国文学書籍などまるで故宮博物院を神戸の垂水つつじヶ丘に持ってきたような具合である。

さて、その作者は中国で本物の兵馬俑（西安兵馬俑坑？）が、春一番の強風に右いつかな動じず姿勢正しく起立していると詠んだ。もともと、兵馬俑が冬の強風にも動ずるものではないが、それでは句が厳しすぎて、趣を失ってしまうのだ。